

令和 2 年 7 月 1 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15H05101

研究課題名（和文）地域の底力を高める「地域への愛着メソッド」の汎用性開発

研究課題名（英文）Developing and measuring utility of "attachment to the local community" method

研究代表者

大森 純子（Junko, Omori）

東北大学・医学系研究科・教授

研究者番号：50295391

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 11,200,000円

研究成果の概要（和文）：“地域への愛着”を育む健康増進プログラム（以下P）をA市2地区で実施し、定量・定質的分析を行った。参加者は、B地区は7名、C地区は14名に対し質問紙調査を実施し地域への愛着尺度とQOL（SF-8）を測定した。愛着尺度の合計得点は92点、SF-8から算出した“健康”の地区毎の平均値の変化を検証した。愛着尺度得点の平均値は、B地区で73.8 78.9、C地区で73.0 73.5、QOL・精神的健康で有意に上昇した。グループ(G)インタビューを1G3-4名計5Gに実施し、参加動機・地域課題が挙げられた。Pの実践の手引きを愛着メソッド小冊子にまとめ、全国の市町村の健康推進課に配布した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

プログラム汎用性の評価を通じて、プログラムは、参加者の地域活動への参加への意識や意欲につながる可能性が示唆された。メソッド原案に基づき、それぞれの地域の特性や資源を活用したプログラムを作成することにより、“地域への愛着”を高めるのに効果的なプログラム開発が期待できると考える。本研究の最終年度には、プログラムの実践の手引きを愛着メソッド小冊子にまとめ、全国の市町村健康推進課に配布した。今後、より多くの自治体がそれぞれの方法で「地域への愛着メソッド」を参照・活用し、地域への愛着を高め健康増進をはかるための機会を検討することにつながると考えている。

研究成果の概要（英文）：A health promotion program (hereinafter referred to as “P”) was carried out that fosters “attachment to the area” 2 districts in A city, and conducted quantitative and qualitative analysis. We conducted a questionnaire survey to 7 participants in B district and 14 participants in C district, and measured the scale of attachment to the area and QOL (SF-8).

A total score of the attachment scale was 92 points, and the change in the average value of “health” calculated from SF-8 for each district was verified. The average score of the attachment scale was elevated from 73.8 78.9 in the B district, 73.0 73.5 in the C district, and the QOL and mental health was also significantly increased. Group (G) interviews were conducted for 1G 3-4 people 5G in total, and the motivation for participation and regional issues were mentioned.

Practical guidance for P was compiled into an attachment method booklet and distributed to health promotion departments in municipalities nationwide.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：地域への愛着 community attachment 地域づくり 参加型プログラム 健康増進プログラム コミュニティ・プログラム

1. 研究開始当初の背景

本研究では、ソーシャル・キャピタルの醸成の礎として“地域への愛着”を位置づけ、先行研究において取り組んだ“地域への愛着”の概念分析(大森, 三森, 小林, 他. 公衆衛生看護のための“地域への愛着”の概念分析. 日本公衆衛生看護学会誌 2014; 3(1)) から、“地域への愛着”により期待できることとして、地域づくりや地域の問題解決力などが確認された。本研究では、居住地における日常の住民間の関係性を重視した公衆衛生看護の実践に親和性のある技法を取り入れ、段階的に“地域への愛着”を育む方法論の汎用性を開発することを試みた。協働自治体と共同実践研究事業としてメソッド原案を活用した介入の評価を行った。

2. 研究の目的

本研究では、“地域への愛着”の醸成のための方法論の汎用性を検討することを目的とした。具体的には“地域への愛着”を育む方法論を「地域への愛着メソッド(メソッド)」と称した上で、地域への愛着メソッド原案(表2)を基に作成した“地域への愛着”を育む健康増進プログラム(以下プログラム)の汎用性について、定量的・定質的に評価することを目的とした。

定量的評価の目的

“地域への愛着”を育むプログラムの前後に実施した質問紙調査の結果から、地域への愛着とQOL(Quality of Life)の変化について定量的に検証することを目的とした。

定質的評価の目的

質問紙の自由記載とグループインタビュー結果から、参加動機、参加者の変化や感想を基に、“地域への愛着”を育むプログラムの効果について定質的に考察することを目的とした。

3. 研究の方法

2015年8~12月に、先行実施の介入研究より愛着形成に有効に作用した4要素(図1)を抽出し、メソッドの構成内容(目標設定、運営手法、学習内容等)に組み込み、メソッド原案を作成した。その後2016年1~4月に評価ツール(個人・地域の変容の指標と評価方法等)を作成した。



図1 “地域への愛着”の4つの構成概念

2017年5～7月にメソッド原案を基にA市の健康増進担当課と研究者で実施方法を話し合い、A市の実情に応じたプログラムを構成した。A市（人口約7万人）は、都市近郊のベッドタウンとして昭和50年代に新興住宅地が造成され人口が急増した。中学校区のB地区（人口約3千人）とC地区（人口約6千人）を対象地区として選択した。B地区は2017年9～10月、C地区は2018年6～7月にプログラムを実施した。

定量的評価の方法

B地区とC地区において、プログラム（全4回の講座；表1）を実施し、参加者に対して、プログラム開始時および終了直後に質問紙調査を実施した。質問紙では、年齢・性別等の基本特性に加えて、地域への愛着尺度（酒井他，2016）およびQOL（SF-8）を測定した。地域への愛着尺度の合計得点は92点（高いほど良好）であり、因子として「Ⅰ：生きるための活力の源（20点）」「Ⅱ：人とのつながりを大切に思う思い（32点）」「Ⅲ：自分らしくいられるところ（20点）」「Ⅳ：住民であることの誇り（20点）」から構成される。これらの愛着尺度、およびSF-8から算出した身体的健康と精神的健康について、地区ごとに平均値の変化を検証した。

定性的評価の方法

質問紙調査、グループインタビュー（以下、インタビュー）による評価を実施した。インタビューは、各最終回終了後に20分間、1グループ3-4名、計5グループに行き、参加後の変化や感想について尋ねた。分析方法は、事前の質問紙からプログラムの参加の動機について、インタビューにおいては、録音データから逐語録を作成し、参加者の変化や感想について内容分析を行った。

“地域の愛着”を育む健康増進プログラムの実施 『A市を好きになってますます健康になろう！』		
	B地区	C地区
時期	2017年9月16日～10月7日	2018年6月16日～7月14日
時間	土曜日 13時～15時（以降は自由解散）	土曜日 13時～15時（以降は自由解散）
場所	地区内の市民交流センター	地区内の市民交流センター
参加者	8名（男性4名、女性4名）	14名（男性4名、女性10名）
運営スタッフ	保健師1名・市職員2～4名 研究班（固定メンバー）1名 + （必要に応じて）1～5名	保健師0～1名・市職員2～3名 研究班（固定メンバー）1名 + （必要に応じて）1～5名
プログラム内容		
	タイトル	目標と育む構成概念
第1回	A市に住む私たち～これからよろしく近所さん～	人とのつながりと大切に思う思いを共有する
第2回	私のA市ほっとスポット～いろいろなA市を見つけよう～	生きるための活力の源を見出す
第3回	私たちのA市ほっとスポット～A市には眠っている価値がある～	自分らしくいられるところを見出す
第4回	A市の未来を語ろう～ステキな街には続きがある～	住民であることの誇りを共有する

表1 プログラムの概要

4. 研究成果

全4回のプログラムは、50～69歳の住民を対象に地区センターで実施した。募集は、対象者に郵送で個別通知した。参加者は、B地区は7名（男性4名、女性3名）、C地区は14名（男性4名、女性10名）であった。運営は、A市の事務職員、保健師、研究班メンバーで行った。目的は“地域への愛着”を高めることとした。内容、形式、時間配分等は、地域の特性や資源を活用

し、小グループでの語り合いや参加者全員の交流を促し、フォトボイスを取り入れた。具体的には、第1回は人とのつながりを大切にすることを共有することを目指し、お互いを知り合うことから始め、「地域への愛着」と健康の関連について講義を受けた。第2、3回は、参加者のお気に入りの場所や風景の写真を持ち寄り、地域の良さや課題について、第4回は地域でどう過ごしていきたいかを話し合った。

定量的評価の結果

参加者は、B地区は7名（男性4名、女性3名）、C地区は14名（男性4名、女性10名）であった。平均年齢はB地区64.3歳、C地区61.2歳であり、平均居住年数はB地区18.7年、C地区16.2年であった。プログラム参加による愛着尺度得点の平均値の変化は、B地区で75.9→81.4、C地区で73.0→73.5といずれも上昇しており、特にB地区では有意差がみられた（対応あるt検定で $p<0.01$ ）。因子別にみると、C地区の因子Iを除き両地区ともすべて平均値が上昇しており、特にB地区の因子IIで有意差があった（25.6→27.7； $p<0.01$ ）。またQOLについては、両地区とも身体的健康について若干の減少があったものの、精神的健康で有意な上昇がみられた（B地区で50.5→53.7、C地区で50.5→52.9；いずれも $p<0.05$ ）。

定質的評価の結果

プログラムの参加動機には、「このまちへの興味」「写真に取り組みたい」「地域活動への参加」「仲間づくりをしたい」等があった。インタビュー結果においては、「自然や景色に目を向けるようになった」等、自分の中の変化が見られた。また、これからの自分とこのまちについて、「地域活動への参加」「私のにとって大切なこのまち」「災害も踏まえた近隣のつながり」という内容が語られた。一方、プログラムの感想について、「話しながら写真集をつくり楽しかった」等の反応があった。さらに、地域の課題についても話題になり、「このまちのいいところが知られていない」「地域住民の参加意識に差がある」「自治会機能の低下」「子育てが終わると地域のつながりが難しい」「退職後の居場所がない」等が挙げられた。

<p>プログラムの目的</p> <ul style="list-style-type: none"> 参加者の“地域への愛着”を高めること。
<p>プログラムの概要</p> <ul style="list-style-type: none"> 開催地域 <ul style="list-style-type: none"> 参加者が居住する中学校区 参加者 <ul style="list-style-type: none"> 対象の選定 向老期世代、50-60歳代 人数の設定 30名程度（スタッフが全体を把握でき、参加者が全体感を持てる規模） グループ編成 1グループ5~6（男女混合、近隣関係を配慮して割り振り） 会場 <ul style="list-style-type: none"> 参加者が居住する地域内、日頃から地域の住民が集い交流する施設 広さは人数に対して大きすぎないスペース 自由に交流できるスペースを設ける（喫茶、成果物の展示など） 期間と回数 <ul style="list-style-type: none"> 2ヶ月間で4回（隔週）かけて実施。1回2時間程度。 プログラム終了後、交流会等を開いてもよい。 内容 <ul style="list-style-type: none"> 地域への愛着と安寧との関係の理解（理解） 地域の良さを見つける地区踏査（フィールドワーク） フォトボイスを用いて地域の良さを紹介し合う（作業と語り合い） フォトを用いたソーシャルマップづくり（作業と語り合い） 地域の過去と未来を知る（理解） アイスブレイクを入れる。茶話会等、自由な交流の時間をもつ。

表2 地域への愛着メソッド原案

本研究の考察として、プログラムの参加によって、地域への愛着および精神的健康が高まることが示唆された。一方で、B 地区の方が開始時の愛着尺度得点およびその上昇が大きかった。B 地区の参加者は平均居住年数が多く、こうした参加者や地域の特性がプログラムの効果に影響を与えている可能性がある。

プログラムに参加した後、参加者は、地域に目を向け、地域参加への意欲を持ち始めていた。プログラムは参加者相互の交流の機会になり、楽しさを共有するだけでなく、地域の課題についての語り合う機会になった。このことから、プログラムは、参加者の地域活動への参加への意識や意欲につながる可能性が示唆された。

メソッド原案に基づき、それぞれの地域の特性や資源を活用したプログラムを作成することにより、“地域への愛着”を高めるのに効果的なプログラム開発が期待できると考える。本研究の最終年度には、プログラムの実践の手引きを愛着メソッド小冊子にまとめ、全国の市町村健康推進課に配布した。今後、より多くの自治体がそれぞれの方法で「地域への愛着メソッド」(図2)を参照・活用し、地域への愛着を高め健康増進をはかるための機会を検討することにつながると考えている。



図2 地域への愛着メソッド小冊子*

* 地域への愛着メソッド小冊子は東北大学大学院医学系研究科公衆衛生看護学分野 HP 地域への愛着研究会ホームページでダウンロード可能：

<http://www.pubnurse.med.tohoku.ac.jp/aichaku/achievement/index.html>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 大森純子、田口敦子、三森寧子、小林真朝、小野若菜子	4. 巻 73(1)
2. 論文標題 地域への愛着を育む取組み 新たな英略的实践の開発	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 保健師ジャーナル	6. 最初と最後の頁 62-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 高橋 和子, 大森 純子, 田口 敦子, 齋藤 美華, 酒井 太一, 三森 寧子	4. 巻 7(2)
2. 論文標題 首都圏近郊都市部の向老期世代の“地域への愛着”に関連する要因.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本公衆衛生看護学会誌	6. 最初と最後の頁 80-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.15078/jjphn.7.2_80	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 酒井 太一, 大森 純子, 高橋 和子, 三森 寧子, 小林 真朝, 小野 若菜子, 宮崎 紀枝, 安齋 ひとみ, 齋藤 美華	4. 巻 73(1)
2. 論文標題 向老期世代における“地域への愛着”測定尺度の開発	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 日本公衆衛生雑誌	6. 最初と最後の頁 664-674
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.11236/jph.63.11_664	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 佐藤 清湖, 森田 誠子, 中野 久美子, 大森 純子	4. 巻 29
2. 論文標題 "地域への愛着"に関する地域活動の文献検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東北大学医学部保健学科紀要	6. 最初と最後の頁 21 - 30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大森 純子, 田口 敦子, 安齋 ひとみ, 三森 寧子, 小野 若菜子, 小林 真朝, 宮崎 紀枝, 今村 晴彦, 酒井 太一, 齋藤 美華, 森田 誠子, 中野 久美子
2. 発表標題 『地域への愛着メソッド』の汎用性の検討-第1報 地域への愛着メソッド原案を基にしたプログラムの作成
3. 学会等名 公衆衛生看護学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 今村 晴彦, 酒井 太一, 田口 敦子, 三森 寧子, 小野 若菜子, 小林 真朝, 宮崎 紀枝, 齋藤 美華, 森田 誠子, 中野 久美子, 安齋 ひとみ, 大森 純子
2. 発表標題 『地域への愛着メソッド』の汎用性の検討 第2報 量的データによる評価
3. 学会等名 公衆衛生看護学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小野 若菜子, 齋藤 美華, 田口 敦子, 三森 寧子, 今村 晴彦, 酒井 太一, 小林 真朝, 宮崎 紀枝, 森田 誠子, 中野 久美子, 安齋 ひとみ, 大森 純子
2. 発表標題 『地域への愛着メソッド』の汎用性の検討 第3報 質的データによる評価
3. 学会等名 公衆衛生看護学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

地域への愛着研究会ホームページ http://www.pubnurse.med.tohoku.ac.jp/aichaku/
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	田口 敦子 (TAGUCHI Atsuko)	慶應義塾大学	
研究協力者	三森 寧子 (MITSUMORI Yasuko)	千葉大学	
研究協力者	小林 真朝 (KOBAYASHI Maasa)	聖路加国際大学	
研究協力者	小野 若菜子 (ONO Wakanako)	聖路加国際大学	
研究協力者	安齋 ひとみ (ANZAI Hitomi)	目白大学	
研究協力者	酒井 太一 (SAKAI Taichi)	順天堂大学	
研究協力者	宮崎 紀枝 (MIYAZAKI Norie)	長野県立大学	
研究協力者	齋藤 美華 (SAITO Mika)	山形県立保健医療大学	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	今村 晴彦 (IMAMURA Haruhiko)	東邦大学	
研究協力者	森田 誠子 (MORITA Satoko)	聖路加国際大学	
研究協力者	中野 久美子 (NAKANO Kumiko)	東北大学	